

長谷川 恩

鼠も小六十

鼠の尻尾も雉の鞘

鼠に投ずるに器を忌む

鼠の尻尾のオデキ

ネズミこと

日本文学

おんちよろちよろちよろち 穴のぞき
またもちよろちよろち、穴のぞき

何やお話、申されそ

ちよいとからだを、

かくされそ

おんちよろちよろちよろち

そのまま穴へ、にげられそ

角谷勝義『民話の四季』より

ねずみもちの木、人なみなるべきさまにもあらねど、葉のいみじう細に小が、をかしきなり 『枕草子』より

あらましの故事も引いた鼠の

『扶桑略紀』卷二十三

醍醐紀

寛平九年十一月一日壬申

因幡国白鼠を献す

春風や

鼠のなめる

角田川 一茶

嫁が君としかもよべども木枕を

なめてさむなん鼠ならめやも 長塚 節

雀子と声鳴きかわす鼠の巢 芭蕉

時事通信社

〔著者紹介〕

長谷川 恩（はせがわ・めぐみ）

大正8年兵庫県生まれ。昭和18年北大農学部農業生物学科卒。農学博士

北大大学院特別研究生、酪農学園短大助教授、札幌医大助教授、北海道立衛生研究所衛生動物科長、同疫学部長、同特別研究員を経て、同54年4月以来、国際協力事業団のタイ地域保健活動向上計画プロジェクト専門家としてタイ国駐在

日本衛生動物学会前北日本支部長、北海道衛生動物研究談話会前会長、北海道寄生虫予防会会長

著書・『北海道ねずみ物語』（北海タイムス社、昭和52年刊）

留守宅・札幌市南区澄川六条四丁目二〇三番二六、澄川団地二号楼一〇一、樺爪方

ネズミと日本文学

発行 昭和五十四年六月二十日

定価 一三〇〇円

著者 長谷川 恩

発行者 立花 丈平

発行所 時事通信社

東京都千代田区日比谷公園一―三 千一〇〇
電話 〇三（五九）一一一―一八（大代表）
振替 東京 四―八五〇〇〇

印刷所 太平印刷社

©1979 MEGUMI HASEGAWA 0095—3199
落丁、乱丁はご取り替えていただきます。

ネズミと日本文学
目次



1 ネズミの身上調書

- 古く『古事記』に登場する 1
語源は「根栖み」か「寝盗み」か 4
ネズミと花嫁の因縁 8
巖谷小波の「ネズミの嫁入り」 11
十二支のトップの「子」 13
発祥の地は南の島か 17

2 ネズミのついた地名

- 「エルムコタン」はネズミ村のこと
不寝見関が「鼠ヶ関」に 21
「鼠坂」は東京に三つ 27
港区に多い鼠の地名 30
千曲川はこうしてできた 32
「鼠谷」はヨメダニとよむ 38
「鼠鳴」の由来 39
「鼠島」は三つ目 40

3 ネズミが使われた名称

- 「鼠木戸」を通過して芝居見物 46
「鼠叩き」や「鼠壁」 48
着物に多い鼠の字 51
「鼠米」と「鼠喰い」 55



オンチヨロ経・鼠ごっこ 59
江戸時代の四軒の鼠屋 65

4 ネズミの評価

諺にみる日本人のネズミ観 69
なぜ小物扱いするか 72
「鼠の尻尾も錐の鞘」 74
不潔な存在とみられる理由 78
過大評価の事実もある 82
泥棒ネズミは一・二パーセント 85

5 ネズミの行状

鼠小僧はなぜうける 88
ネズミの盗みは生存本能 92
お金を盗む変わり者 96
死ぬまで延びつづけるネズミの歯 99
歯のたたぬものはない 103
武器をかじられて大敗 106
お寺であばれたネズミ 108
時間をかじるやつもいる 111

6 ネズミの住みかちと移動

『古事記』に出てくるネズミの巣 115
おむすびころりんの民話 117



7 ネズミの宿敵

- ネズミがお金を運んできた 121
新田次郎の「ラットサイン」 123
集団移動は『日本書紀』にも三件 128
ネズミの集団大発生の記録 130
開高健「パニック」と西村寿行「滅びの笛」
ネズミの出ない井上ひさしの「黄色い鼠」 136
138

- 数多いネズミの天敵 138
ネコを逃れて都落ち 141
ネズミとりをやめた漱石のネコ 143
左甚五郎の傑作ネズミ 147
鳥、キツネも天敵 150
ネズミ撲滅にイタチとヘビが一役 153
何といっても大敵は人間 156

8 ネズミの妖怪

- 「先代萩」の仁木弾正 161
『兎園小説』などの大ネズミ 164
『四谷怪談』の化けネズミ 166
化けネコの化けネズミ退治 168
四つの中国の話 171
人間がネズミになった 172
頼豪のうらみ、八万四千匹のネズミ 174



9 ネズミを祭る

- ネズミの被害をまぬかれるために 177
頼豪と日吉大社と馬琴と 180
伊豆下田の子聖権現 184
敵の弓弦、兵具をかじる 186
ネズミの死骸から大黒天 189
子の神、子の日祭り 190
ネズミの碑や塚のかずかず 193
姿を消した幻の碑 196

10 ネズミと人間の交流

- 古くからペットとして 198
白ネズミは瑞兆のしるし 201
にせの白ネズミの話 203
ネズミは家族の一員 206
ネズミの報恩物語 210
宮沢賢治と関根弘の世界 213
ネズミ関係文学作品一覧・索引 219
あとがき 233

装 幀

加儀行正

カバーイラスト

川村 易

1 ネズミの身上調査



古く『古事記』に登場する

クイズ番組ではないが、日本で一番古い書物は何かということ、実はよくわからないらしい。現存の最古の印刷物は、称徳天皇の『百万塔陀羅尼』とされているが、これの出版された西暦七七〇年よりも前の和銅五年(七二二)に『古事記』発行の作業が始まっているというのだから話はややこしい。しかし、常識的には、この『古事記』が一番古い本だと考えていいだろう。

この『古事記』の中に、ネズミはすでに姿をみせる。須佐之男命すさのおのみことのために焼き打ちにあった大國主命を助ける大切な役割を担って登場する可憐なネズミである。ただし、彼が何という種類に属するネズミであったかはわからない。たぶんハタネズミだったろうと想像されるが、ドブネズミであったとしてもおかしくない。

元来日本人は自然科学的に物を観察することは不得意である。ネズミはネズミでいいではないか

という考え方が、文学の世界では一般的のように思われる。だから、ネズミについて詳しく解説をした書物はあまり見当たらない。

もちろん、詳しくはなくても、この種の記述が全くみられないわけではない。『和名抄』『本朝食鑑』『大和本草』『本草綱目』『昆虫草木略』『図書集成』などの書物には、いずれもネズミについての解説がみられる。そしてこれらを基礎にして、正徳二年（一七二二）、医師寺島良安が、彼の『和漢三才図会』（卷第三十九）に、「鼠類」の表題のもとに、ネズミの知見を集約して紹介することになる。

『和漢三才図会』は、なかなか興味深い書物である。良安が範を明の王折の著『三才図会』にとり、天文、人物、器物、地理、動植物などについて、一〇五卷にわたって解説した江戸時代版百科学事典である。

しかし、ことネズミに関してだけみても、その内容には首をひねりたくなるような解釈も採用されている。例えばネズミの肝を目にさすと緑内障がなおり、鳥目が治癒し、耳の中に入れると聾がなおるなどと記されているのである。

同書は冒頭の総論につづき、各論として二十三種のネズミが挿絵つきで挙げられている。中には著者自身がネズミの仲間ではないと断わっている隠鼠カクレネズミなど七種もあるが、残りの十六種も、今日の生物学でいう種類とは無縁である。しかし私は、本書では、科学的にネズミを取り上げるつもりはないので、良安先生のあげられた種類のうちで、文学書にも顔を出す種類を拾い上げて、筆をすすめる。

に麝香鼠というものあり」と述べられたものである。身体も糞も麝香の匂いが強く、一度この匂いがつくと、洗ってもなかなか落ちないとある。良安先生は、このネズミは長崎に住むと解説しているが、いずれにせよ九州の産らしい。

このように『和漢三才図会』の記載は、かならずしも科学的な正確さは保証できない。しかし、そのことでこの書物の価値が損われるとは思われない。少なくともネズミを動物として眺め、単一の種類でない事実に着目した発想は、高く評価されてよいであろう。

しかし、折角の良安先生の努力にもかかわらず、日本人が文学の世界でネズミを扱うに当たっては、細かい分類は無視して漠然と、ただネズミとして扱われている場合がほとんどである。

そこでこれから取り上げていくいろいろな作品でも、特別な例を除いては、それが何という種類のネズミかは詮索しない。またそれは望んでも不可能の場合が多いからである。

語源は「根栖み」か「寝盗み」か

そこでネズミという呼称だが、これには幾つかの語源説がある。

まず『古事記』に顔をみせたネズミの記述にもとづいて、新井白石は『東雅』の中で「さらばネズミというは、ネとは『猶根堅州国』などいうが如く、幽陰の所をさすなり。スミとは栖すゐなり。その穴居するを云いしなるべし」と「根栖み説」を展開している。

一方、貝原益軒は『日本釈名』という著書の中で「鼠、ぬすみなり。『ぬ』と『ね』と相通ず。ぬすみするものなり」と「盗み転化説」を主張する。

また『倭訓栞』(前篇)には、益軒先生のものよりもっと徹底した説が述べられている。すなわち、「寝盗みの義なるべし。人の寝て後によく出て盗み食うものなり」というわけで、ネズミの行動の時間的要素をも加味したものである。

この三つの説に加えて、重要な関所に付けられた「不寝見」の名前——次章の地名のところで紹介する——も、「寝盗み説」を思い合わせると、有力なネズミ語源説に加えてもよさそうである。以上の四説のいずれが正統的なネズミの語源であるかは、目下のところ何とも結論を下せない。強いていえば、新井白石の「根柢み説」と、貝原益軒の「盗み転化説」の二つということになる。が、両説のいずれかということになると、その決定はむずかしい。ただ、国粹主義者の白石が『古事記』にもとづく議論を展開し、勤儉を生活信条とした益軒が「盗み」を問題にする命名論を主張していることは、なかなか面白い。

さらに、このネズミは、しばしば別の名前で呼ばれることがある。「寝盗み説」を記した『倭訓栞』では「羽州(秋田・山形両県)には鼠をばかという」という個所があるが、普通はむしろ愛称的な異名が用いられるようである。橘正一氏の「北海道方言雑考」と題する小論文には、次のように書かれている。

先ず鼠の方言には、アネサ(姉様)、アネマ(姉様)、オキヤクサン(御客様)、オジヨロサン(御女郎様)、ガンド(強盗)、コソ(コソ泥)、フクタロウ(福太郎)、フクノカミ(福の神)、オフク(御福)、ユルノヒト(夜の人)、ユルドリ(夜鳥?)、ヨメドノ(嫁殿)、ヨメゴドノ(嫁

御殿)、ヨノモノ(夜の者)、ヨモノ(夜者)、ヨメサマ(嫁様)、ヨメッコ(嫁っ子)、ヨメゴ(嫁御)などがあります。

こうした異名が多様に存在するのは、一般にネズミは人語を解すると信じられており、ネズミ捕りを仕掛ける際に、ネズミを捕ろうなどと話すと、彼らが用心するばかりでなく、逆にひどい仕返しをすると考えられているためで、『沖繩民話集』にある「天井のねずみ」と題する民話にも、その理由から、彼の地では、天井の翁(ウシユメ)と呼ぶという言い伝えが紹介されている。これらの異名の中では、やはり「よめが君」が一番有名だろう。『物類称呼』(二)では、

明くる夜もほのかにうれし嫁が君

其角

の句を紹介して、ネズミをよめが君と呼ぶ習慣が、広く全国的にみられる事実を指摘している。次章で紹介する富山県婦負郡八尾町の鼠谷を、ヨメダニと読ませるなどはその一例といえる。

この嫁が君は、俳諧の世界ではことに重要である。すなわち「三が日の鼠をいう『柳亭筆記』四」ものであることは、改めていうまでもないと思うが、正月の数日、主役の座をあたえられるネズミは、果たして人間のこの扱いに感謝しているだろうか。それはともかく、この正月のネズミ、嫁が君をよんだ句はきわめて多い。そのすべては紹介できないが、私が歳時記などを手がかりに集めた五十首以上の作品の中から、数句を引用してみよう。

よめが君餅をぞきようは初かぶり
貞徳
どこからか日のさすなや聞やよめが君
鬼城
三宝に登りて追われ嫁が君
虚子
ほの暗きしのび姿や嫁が君
碧梧桐
内陣をお馬駈けして嫁が君
月尚

もちろん嫁が君は俳句の専売ではない。

よめのこのこねつみ（子鼠）いかになりぬらん

あなうつくしとおもほゆるかな
〔和泉式部本集〕

よめのこのはちす（蓮）の玉をくいつるは

つみうしなわんとやおもうらん
〔定頼集〕

などの作品を見ると、古くから和歌の世界でも、この呼び名が用いられていたことは明らかだし、

嫁が君としかもよべども木枕を

なめてさむなむ鼠ならめやも
長塚 節

と近代の短歌にもその名を止めている。

さらに川柳にも嫁が君は登場する。ただこうした川柳になると季節感が希薄になることは避けら

れず、単にネズミの代名詞として用いられているものが多くなるのはやむをえないようである。

箱入りで縁づく白の嫁が君

餅花に是こゝは是こゝはと嫁が君

この後の句は、有名な

餅花やかざしにさせる嫁が君

芭蕉

の句をもじったものであることは、俳句をたしなむ方なら容易にお気づきであろう。

ネズミと花嫁の因縁

ところでこの異名が作り出された背景には、それなりの理由があったはずである。すなわち、嫁が君のヨメは、おそらくは「夜目」に由来するものであろう。ネズミの行動が人間が寝静まった夜にもつばら集中しているのは、ご存知のとおりである。そこで何となく、ネズミは暗闇でも物が見える優秀な視力の持ち主と考えられるようになる。だが実際に彼らの行動を支えているのは、ヒゲを使った触覚であって、視覚はむしろ貧弱なのだ。そんな事実とは無関係に、夜目からヨメの呼び名が生まれたものらしい。

しかし漢字の嫁の字が用いられてみると、どうしてもあてやかな花嫁姿が連想され、その結果、ネズミの嫁入り話が誕生するというのもごく自然な成り行きだったようである。

『世事百談』は、ネズミの嫁入りは「鼠の異名を嫁の君といえるより作意したものとおもわれる」と説明し、よく嫁いびりの内容だと誤解されている歌の、

「秋なすびわささのかすに漬^つけてませ

柵におくともよめにくわすな

の歌のよめは、ネズミを指すものであることを明解に説いている。

なお、この『世事百談』には、荻生徂徠にまつわるエピソードが紹介されている。これもネズミの名前に関係のあるもので取り上げておこう。徂徠は世事百般知らぬことはないと日ごろ自慢していたらしい。そこでこの高慢の鼻を折ってやろうと、大岡越前と思われる人物が、ある書の中でネズミの名前に仲と付けられてある点を引き、その理由を質問する。すると徂徠先生は『抱朴子』という漢書の記述から、その由来を直截に答えたので、質問者もその博学ぶりに感服したというのである。この同じ話は『先哲叢談』(一八)にもあるので、かなり有名な出来ごとだったのだろう。

話をネズミの嫁入りに戻すことにする。『嬉遊笑覧』(一一二)には、ネズミが飢饉には勝てなかったという話があるが、その前段に「いにしえは鼠のよめ入とて果報の物と世にいわれ」と、ネズミを説明する。この文を借りるまでもなく、嫁入りということになると、それは目出度いできごととみられるのは、あるいは当然でもあろう。

このように、次第に人々になじみ深い言葉となるにしたがい、その言葉に内容を与えようと考えるようになっていくことも、ごく自然の成り行きだったようで、そうした試みの中に、興味深い作